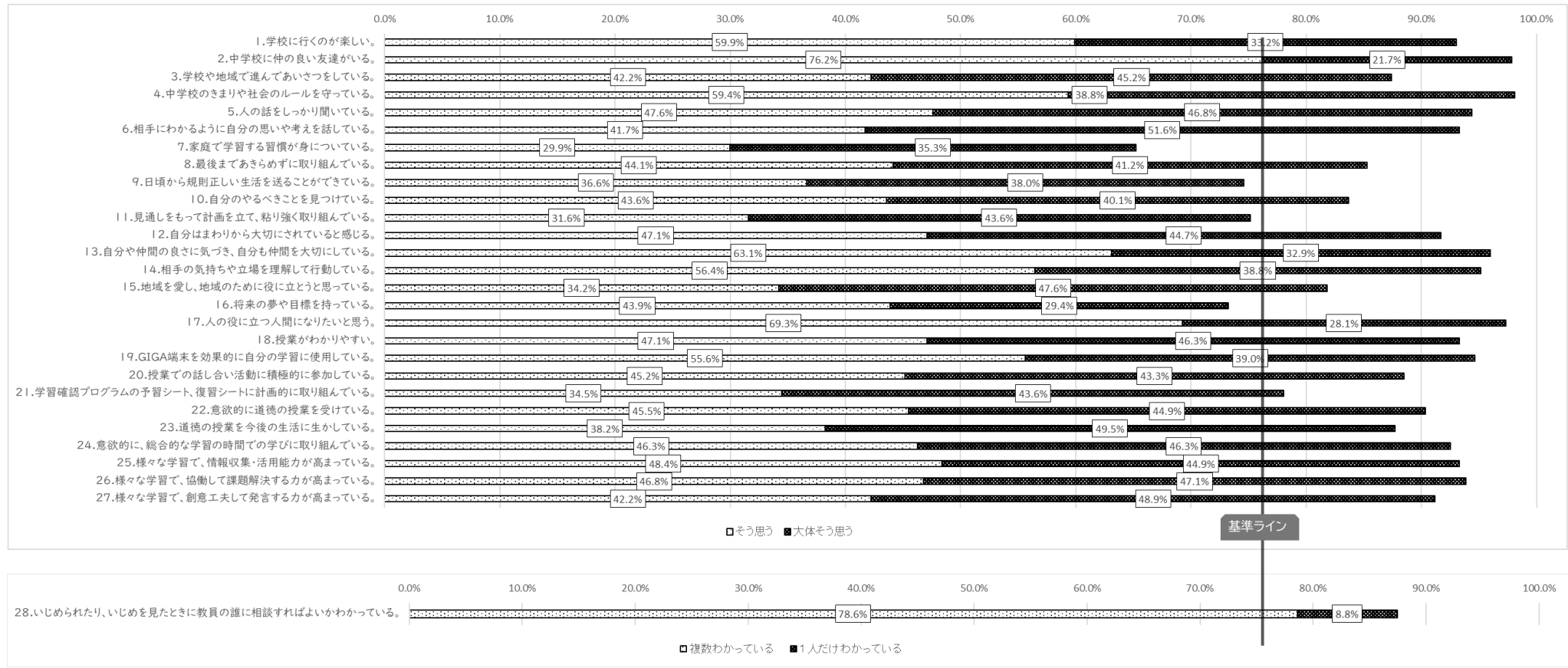


令和7年度 上京中学校 学校評価アンケート結果（後期）

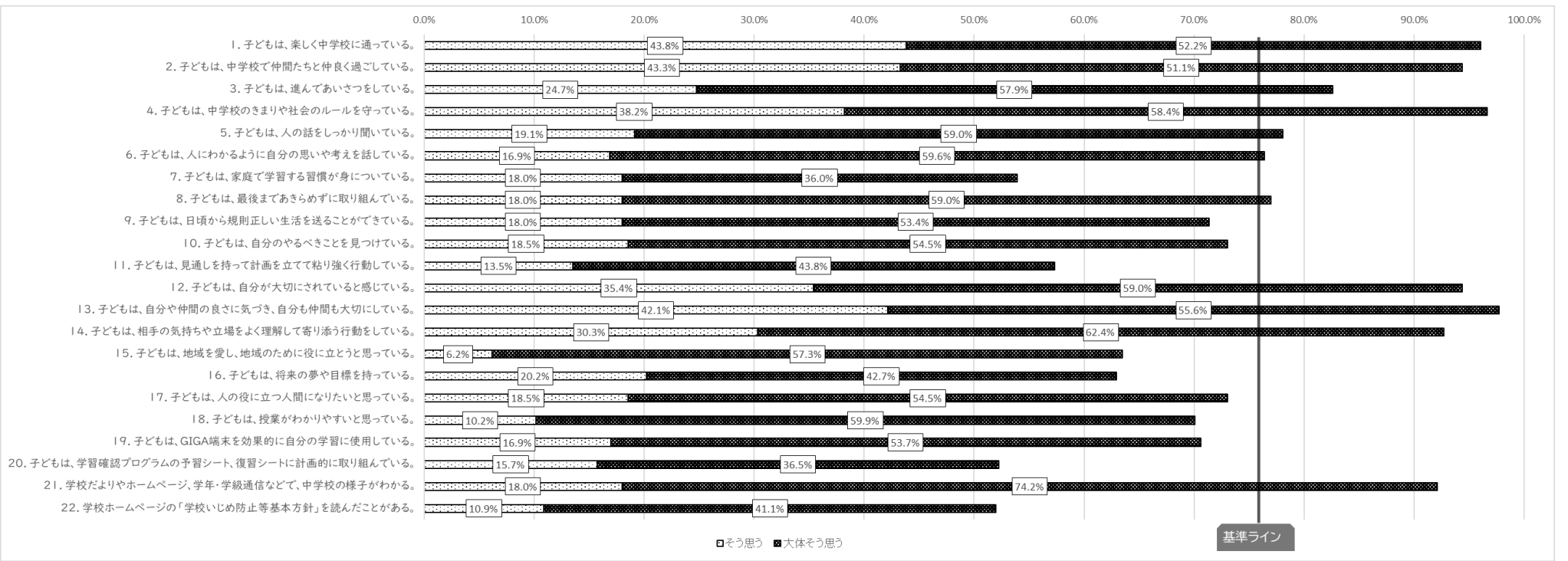
【結果の見方について】

- ・生徒、保護者、教職員とも Forms にてアンケートに回答していただきました。
- ・肯定的な回答のみ（横棒グラフの左から「そう思う」「だいたいそう思う」の順）をグラフ化し、75%を判断基準としています。

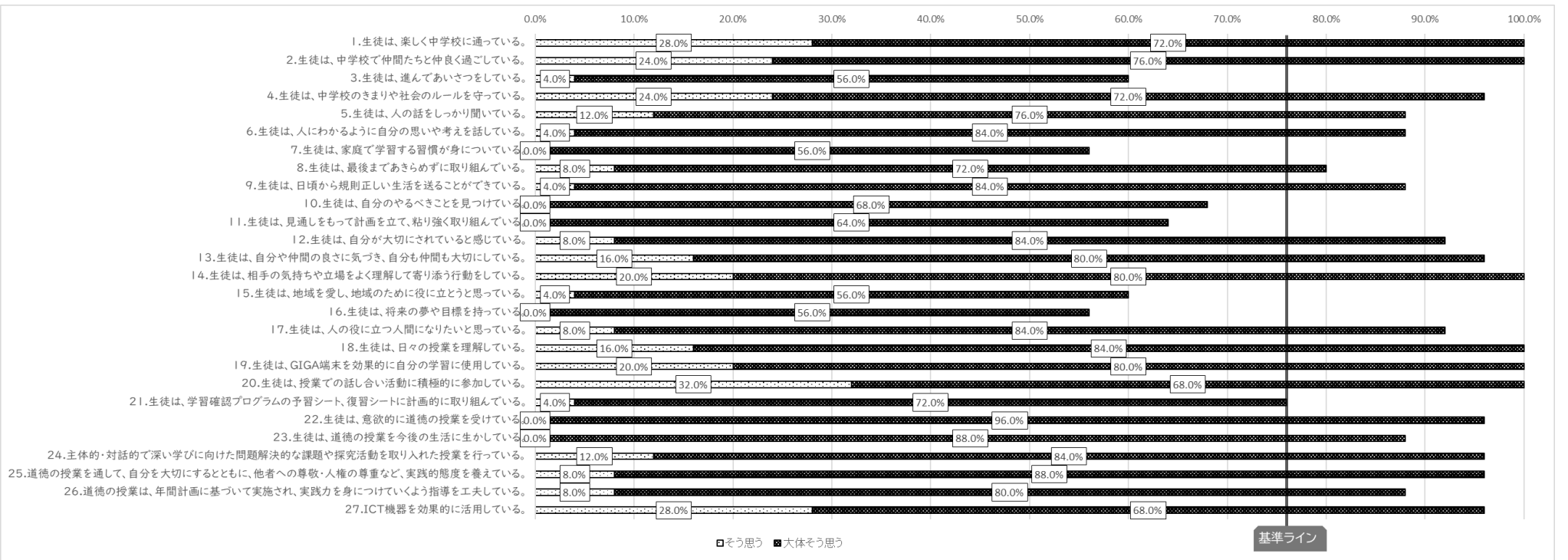
生徒



保護者



教職員



【結果をもとにした考察】

＜設問 5・19・25＞情報収集・活用能力（知識及び技能）

後期においても、＜設問 19＞で高い結果が見られました。（前期85％→後期94.6％）

生徒が GIGA 端末を主体的に活用する場面は定着しつつありますが、情報活用を「自分の力として実感できているか」という点では「そう思う」が48.4％と伸びしろがあります。引き続き、授業や探究的な学びの中で ICT を活用し、情報を集め・活用する力をさらに高めることを目指します。

＜設問 20・26＞協働して課題解決する力（思考力、判断力、表現力）

生徒・教職員共に、＜設問 20＞では後期も高い結果となりました。協働的な学びが学校全体に広がっていることが分かります。今後も、話し合いや共同作業の場を意図的に設定し、他者と協力して課題を解決する力が身につくように努めます。

＜設問 6・11・16・27＞創意工夫して発信する力

（思考力、判断力、表現力／学びに向かう力、人間性等）

後期においても、＜設問 11＞「計画的に取り組む」にやや低い結果が見られました。（前期76.6％→後期75.2％）

今後は、総合的な学習の時間（上京タイム）や探究活動の中で、計画→実行→振り返り→改善のプロセスを意識できるようにするとともに、自分の考えを創意工夫して発信する力を育てます。

＜設問 8・17＞折れない心（チャレンジ精神）

生徒は「挑戦する気持ちがある（前期85.8％→後期85.3％）」と感じている一方で、前期は保護者の肯定的な回答が基準ラインに到達していませんでした（73.6％）。しかし後期は、保護者の回答が基準ラインを超え（77％）、生徒の挑戦する姿勢が家庭にもより肯定的に受け止められていることが分かりました。

今後も、学校での挑戦の様子や取り組みの過程を保護者の皆様にも伝え、生徒の前向きな姿勢を共有できるよう努めていきます。

＜設問 12・13・14＞自他理解と自尊心（自己肯定感・自己有用感）

後期も高い結果を維持しています。

今後も、自分を認め、他者を尊重する心が育つよう、日常の指導や様々な教育活動を継続し、自己肯定感・自己有用感の維持・向上に努めます。

【保護者のみなさまへ】

令和7年度後期の学校教育アンケートにご協力いただき、誠にありがとうございました。前期に続き、多くの保護者の皆様にご回答いただきましたこと、深く感謝申し上げます。

後期のアンケート結果では、GIGA 端末を「効果的に使えている」と回答した割合が前期より 9.6 ポイント上昇しました。これは、本校が研究指定を受け、深い学びに向かうための ICT 活用について継続して取り組んできた成果として表れているものと考えています。今後も、生徒が主体的に学びに向かうための端末活用をさらに充実させてまいります。

また、チャレンジ精神については、前期は保護者の皆様の肯定的な回答が基準ラインに達していませんでしたが、後期は基準ラインを超え、生徒の挑戦する姿勢がより前向きに受け止められていることが分かりました。学校での取り組みや挑戦の様子を引き続き丁寧にお伝えし、家庭と学校で生徒を支えていただくと考えております。

このほか、自由記述でいただいたご意見や、アンケートから見えてきた課題につきましては、改善策を検討し、今後の学校運営に生かしてまいります。今後とも生徒の健やかな成長のため、ご理解とご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

【生徒アンケートから見える生徒の成長と課題】

■ 校則の理解（設問 4）

生徒の校則に対する理解は高く、自分たちで守ろうとする意識も定着しています。

今後も「さわやかなマナー」の定着を図るため、日常の言動に意識を向けるよう、継続的な指導を行ってまいります。

■ 計画的な学習（設問 7・11）

依然として課題の大きい領域です。（設問7：前期66.6％→後期65.2％）

生徒・保護者・教職員とも同様の傾向が見られ、学習の見通しを持つことや家庭学習習慣の定着が不十分です。授業と家庭学習を連動させ、目標設定→振り返り→改善のサイクルを意識できるように取り組んでまいります。

■ あいさつの習慣（設問 3）

生徒・保護者の評価は安定していますが（後期生徒87.4％ 保護者82.6％）、教職員の評価は比較的低い状況です（前期60％→後期60％）。

教職員自身の関わり方や声かけの質が問われる項目であり、あいさつの意味や方法について教職員間で共有し、学校全体で取り組んでまいります。

■ チャレンジ精神（設問 8・17）

生徒は挑戦する気持ちを持っていますが、保護者との認識に差があります。挑戦の場面を可視化し、成果だけでなく過程を認める文化づくりを進めてまいります。教職員の声かけやフィードバックの質が、生徒の意欲に大きく影響するため、丁寧な関わりを心がけてまいります。

■ 自己肯定感・自己有用感（設問 12・13・14）

高い結果を維持していますが、継続的な支援が必要だと考えています。特に、承認の言葉・役割の付与・仲間との関わりを通じて、自尊感情を育てる場面を意識的に設けてまいります。